The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	絵本の中のデザインと教育 ： ピエール・プロブスト「カロリーヌシリーズ」について
Author(s)	松村, 由紀
Citation	デザイン理論. 2009, 54, p. 62-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53424
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

絵本の中のデザインと教育
── ピエール・プロブスト「カロリーヌシリーズ」について ──

松村由紀／京都工芸繊維大学大学院　博士後期課程

1　研究発表の背景と目的

フランスの絵本作家である，ピエール・プロブストの『カロリーヌシリーズ』（Pierre Probst/Caroline Series）は，日本の絵本ファンの中で，永きにわたり人気を博す，名作絵本シリーズである。日本国内において，1967年初版の小学館発行の『オールカラー版世界の童話シリーズ』で多くの読者を得た本シリーズは，小学館版の廃版以降，1998年にBL出版により『カロリーヌとゆかいななかまたちシリーズ』として復刊されたことにより，２世代にわたる根強いファンを得た。

この絵本を採り上げたのは，私自身が幼い頃より親しみ，「心のよりどころ」となる絵本だからであると同時に，現在進行形で，ＰＴＡの一員として読書ボランティアサークルに参加し，４年間続けてきた「読み語り」でよく読んできたからである。朝，教室に入り，８時40分～50分の10分間，本シリーズを読むと，瞳を輝かせ物語の中に入っていく，子ども達の穏やかな表情が窺える。

私自身の研究テーマである「幸せのヴィジュアルコミュニケーションデザイン ── デザインと教育の研究」に含まれる，「クラスの輪を作るデザイン」に，この『カロリーヌシリーズ』の，子どもの心にもたらす求心力やその教育的意義が関連づけられるのか，作者であるピエール・プロブストの作品研究を通して，考察する必要があると考えた。

2　研究方法と検証

本研究では，なぜこの『カロリーヌシリーズ』が魅力ある作品として成立したのか，また，その教育的側面について明らかにするために４章に分けて論じた。

第１章では，発表者の研究テーマである「デザインと教育」と本発表がどのように繋がるかについて，レイチェル・カーソン『The Sense of Wonder』とのつながりを，「感性」というキーワードで述べ，その重要性を問題提起した。加えて，子どものためのメディアリテラシーという分野が，子どもの心を育てる「感性」として重要であると主張し仮定した。

第２章では、本発表で採り上げる『カロリーヌシリーズ』の作者であるピエール・プロブストについて，作品と経歴を紹介した。

ピエール・プロブストは，1913年フランスのアルザス地方ミュルーズに生まれ，地元の美術学校で絵画を学んだ。絹織物の下絵を描き，出版・広告の仕事とともに，第二次世界大戦での捕虜という経験をへて，愛娘シモンヌをモデルにした『カロリーヌのシリーズ』をパリの出版社アシェット社（Hachette）より1953年に発表した。このシリーズは子ども達の絶大な人気を得て，日本をはじめ16カ国で翻訳出版された。他に『ファンファン』や『ティム』シリーズなどの絵本や，歴史絵本『人間の生活シリーズ』などがある。2007年４月12日，シュレーヌにて逝去している。

第３章では，具体的な作品の分析をアンケート調査やプロブストのバックグラウンドを鑑みて解説し，その魅力に迫った。登場人物のキャラクター設定について，まずカロリーヌのモデルとなった愛娘シモンヌや祖母カロリーヌを紹介し，1950年代のニーズとし

て鮮烈なデビューを果たした自由闊達で行動的な女性キャラクター「カロリーヌ」を，時代のニーズやプロブストの思いから考察した。

８匹の動物キャラクターは，アシェット社のマーケティング戦略からなる廉価な絵本のニーズより生まれ，確たる彼の持ち味である「動物キャラクター」が時代に合致し花開いた。

ストーリー面については，プロブストの戦争体験や経歴より生まれた「歴史もの」への情熱や「自立精神」について検証し，子どもの心を育む「自立的ストーリー展開」について，波多野勤子氏の解説文等も参考に論じた。

ヴィジュアル面については，「コマ割り的な漫画的手法」や，「１つのシチュエーションの隅々まで描かれた手法」を紹介し，時間の流れを象徴的に簡潔に表したプロブストの洞察力ある表現について解説した。独自に発見した「必ず存在する金赤という色」では，彼の絵作りで必ず登場する「金赤」に注目し，『北極へいったカロリーヌ』で「金赤」を除去する実験をし，その意図的トリックについて示唆している。

また，プロブストの３Ｄ的な奥行きのある画面構成について，ベノア・ブリュアン（Benoit Bruant ／ミュルーズ大学准教授 ── 2004年～ 2005年の「ピエール・プロブスト展」を地元ミュルーズ大学附属博物館で開催し，『Caroline: une héroïne de papier devenue icône du 20ème siècle ／カロリーヌ：20世紀のアイドルになった紙上の主人公』の著者）や，ジョルジュ・ビショッフ（Georges Bischoff ／ストラスブール大学教授 ──『Caroline la Mulhousienne. Le petit monde enchanté de Pierre Probst ／ミュルーズ人のカロリーヌ ── 魔法にかけられた，ピエール・プロブストの小さな世界』の著者）の論文より，クールベの影響を示唆するような作画をいくつかピックアップし，自然主義や写実主義的表現を紹介した。

さらに，アンケートで大人から子どもまで最も支持の高かった，『カロリーヌのつきりょこう』については，ドラマティック・エンターティメントであるとし，普遍的でありながらも奇想天外で，突如として起こるアクシデント～ハッピーエンドという，彼の追求した映画的なエンターテイメント性が母体であり，当時の時代背景を鑑みて企画された，「デザイン」であると論じた。

第４章では、本発表の結論として、問題提起している現在の教育現場に必要な事柄について，これまでの『カロリーヌシリーズ』の分析から提言した。「クラスの輪をつくるデザイン」は，冒頭の『The Sense of Wonder』の自然を体感する感性や，『カロリーヌシリーズ』の，芯の通った子ども達の自立的ストーリーに育まれており，それが，子どもや大人達のヴィジュアルコミュニケーションに温かい空気をもたらし，「幸せの教室空間」を生み出すのであると主張した。

最後に，これまでの分析により，デザインの「アイドマ」的手法がプロブストの作品に存在しているとし，それが，子どもの心に『カロリーヌシリーズ』の登場人物と自身を重ね合わせ，同化させ，ストレスの多い現代社会からしばし離れ，自立した子ども達だけの冒険の世界へ誘い，欲求を満足させているのだとしている。

「世界は広い，人生は冒険である～」と語りかけてくるようなプロブストの，お説教の一切ない，人々を楽しませるエンターテイメント性と，平和を恒久するヴィジュアルの発信こそが，これからの教育現場で必要であると結論づけた。